

マイ・オウン・スペース

中央大学高校 P N 永宮 悠

園部が、か。一応三年間同じクラスだったからな。そんな悪い奴じゃないと思ってたけどな。足首を組むと、履きなれたローファーがゴツと音を立てた。

「すいません。フックを閉じてもらってもいいですか」

入学式後の写真撮影で、隣の生徒に声をかけられた。学ランのフックを引っ掛けるのにこずっているのを視界の隅で見ていたから、俺はすぐ「ああ、うん」と言っただけでフックを掛けてやった。その時、簡単な自己紹介をした。だから、園部は俺が中学に入学して初めて話した相手だ。どちらかというややせ型で、おでこが広かった。眼鏡をかけていて、顔にいつも笑みを含んでいた。俺は園部には話しかけやすかった。自己紹介で宇宙への興味を語っていたから『ゴズミックフロント』を観ているかと尋ねてみると、なんと園部も観ていることが分かった。柄にもなく大きな声をあげてしまいうくらい嬉しかった。ただ、園部はノリがいいというか、誰とでもハキハキ、ウキウキ話すから、他のクラスメイトとも仲が良かった。みんな大人しかったけれども、園部は女子ともよく談笑していた。それでも園部が特に俺とよく喋るのは、帰り道の大部分が重なっていたからだろう。

二年生になるとお互いの交友関係が広がって、園部と話す機会は大きく減った。しかしその時はまだ、たまに言葉を交わすだけで安心感を得られた。園部の成績は察していたけれど、俺は密かに園部を尊敬していた。排他的なクラスの一軍に鼻であしらわれても、園部はまた笑顔で話しかける。その陽気さと行動力が欲しいと思った。ウザがられていた節はあったが、園部がクラスで一番人に優しく、心が豊かな人間だと思っていた。

園部はその年の合唱コンクールでピアノを弾いた。古田さんに頼まれるとすぐに引き受けたらしい。確かにピアノは上手かったけれど、男声へ指示が一方的だった。パート練習では先生にも注意されていた。

本番二週間前。クラス全体の練習で、園部に何度言われても男子の多数が譜面を手にしたまま歌っていた。ついに、園部の堪忍袋の緒は切れたらしかった。ため息をついてから（俺を含めて）男子の手元にある譜面を無言で奪って回っていた。俺の後ろにいた図体のデカイやつと譜面の引つ張り合いになり、その譜面がピリツと破れた。その男子は、口と目がぼかんと開いた俺と目が合うと「頭おかしいだろ」と静かにつぶやいた。それから、俺はその男子と園部の話をするとき、鼻息を増やして笑うことにしていた。

合唱コンクールは優勝を逃した。それでも打ち上げは和気あいあいとしたものだった。園部はいたたまれなさも感じていただろうが、大役から解放されて晴れ晴れとしていた。それに、男子も女子も俺も、表面上は園部の扱いに変化がなかったのだ。本番が終わり、自然とわかまわりが流れていったのだろうか。いや、そうではない。園部と俺たちの距離感、はなからこれくらいだったのだ。それに気づいたとき、園部への同情と冷淡な自分への恐怖が混じって、

初めて戦慄を覚えた。

俺が野球部を引退しても、園部と二人で帰ることはめったになかった。俺が友達と帰っていると、園部は何メートルも後ろを歩いた。

久々に園部と二人きりで帰った日、園部はいつにましてハリのある声で語りだした。

「宇宙船が太陽系に来たかもしれないんだよ。太陽の近くに来た天体がこれまでの物理学では説明がつかない動きをしたんだって」

俺はその話を疑った。それでも「物理学では説明がつかない」という文句に興奮を覚えた。

「知ってた？」

「別に知らなかったけど」

顔を覗く園部に、俺は努めて弱い声で答えた。塾が忙しく『ゴズミックフロント』を観る習慣はなくなっていた。

「かなりすごくない？ 宇宙人が存在する証明になるかもしれないわけじゃん」

「へえー」と気の抜けた返事をする、園部の声はややトーンダウンした。友達が来てくれて良かったね、なんて俺は園部を心の内で笑った。さすがに園部が気の毒だから、それからは気の利いた言葉を返した。

今日、帰り道で西田と会った。公園のベンチに座って長く話した。西田の方は別の高校で野球を続けていて、二年生のこの夏に引退する。通例の、野球部の黒い話がひと段落したところで、園部が退学した話を聞いた。同じ高校だからわかったのだろう。一年生の時、クラスメイトとの人間関係をうまくやれなかったらしい。学年初の退学者だという。

ベンチから立ち上がるとよろけて転びかけてしまった。ローファーを履く義務はないが、高校の野球部の連中に倣って履いている。さすがに二時間以上履いていると指が痛んでくる。

別れて暗い坂道を下りながら、園部のことを考えた。園部を嫌う人がいてもおかしくない。みんな、きれいが好きなんだ。その人が悪人なわけではない。ただ、俺が普通の人間で園部が宇宙人だとしたら、園部の視点では周囲の人間がすべて宇宙人に見えるのかもしれない。そんな空想をした。

その時、宙に流れ星が光った。違う、もっと大きく赤い尾を曳いていた。火球だ。一瞬で消えていった。まさか、死んでないよな。気が抜けて口角が上がった。それに気づくと、自分がきたなくて、みじめで、いやしく思えた。やもすると、俺の方がとくに死んでいたのかもしれない。